

桜蔭俳話会 九月句会 (第二八九回) 桜蔭会館

平成二十二年九月二十六日

- 4点①指揮棒の静止の一瞬秋気澄む 幸  
 4点①湯上がりの水のうまさや月を待つ 友子  
 2点①船乗りの元町が好き敬老日 貞勝  
 脳死てふ曖昧な死や月に雲 守  
 せんべいの香を裏返す秋まつり 貞勝  
 一筋の道ひとすぢの曼珠沙華 守  
 蕎麦の花土蔵ほろほろ土こぼす 貞勝  
 1点①端正に積まれし薪の数しれず ヤエ子  
 ①八方は山ばかりなり星月夜 ヤエ子  
 風抜ける坂の途中の青みかん 友子  
 陸村のねずみ返しや秋旱 ヤエ子  
 なほ残る大地の熱や蚯蚓鳴 守  
 縁側は無けれどペランダ月見かな 溪水  
 児童等の歌声に気の九月かな 眞三  
 ※ 晴れて秋展望アロア人多し 眞三  
 せ七の穂一本立てし月祀 秀一  
 連日のほてりさまして秋の雨 溪水  
 秋澄むや逆さモンブラン映す池 ヤエ子  
 里川の流れふち取る曼珠沙華 友子  
 県展を見てのど乾く美術の秋 眞三  
 鯉の朱のはつかに動く秋の暮 秀一  
 星月夜まぶたに浮ぶ戦時の夜 溪水  
 抑留を語らぬ父の忌遠雷や 幸  
 仕込味噌の味は花丸昔汁 幸  
 白萩を乱れさせたり昨夜の風 友子  
 自動車のバックする音居待月 秀一  
 踏み閉す鎧戸きしみ秋暑し 貞勝  
 日に透ける椽の実の果皮もえぎ色 ヤエ子  
 虫の音を聞きて湯舟になが湯かな 眞三  
 物ぐさを引きづりしままの残暑かな 溪水  
 鎌倉の谷戸を抜けきし雁渡し 貞勝  
 秋の宵一人楽しむ友の文 幸

- 足跡のミステリイめく秋の苑 秀一  
 湧き出づることく子等寄る盆踊 友子  
 魚の眼の溶け出してみし残暑かな 守  
 数独の枡の埋まらず台風裡 秀一  
 煉原の炎となりし曼珠沙華 守  
 琴の音の和して流るる秋の宵 眞三  
 物忘れ猛暑続きのせみにして 溪水

不在投句 (瀬戸溪水、野上貞勝、稲葉幸)